

沖縄県の小学校複式理科カリキュラムの現状

○松田恒一郎^A, 吉田安規良^B, 八田明夫^C, 橋本健夫^D

MATSUDA Koichiro, YOSHIDA Akira, HATTA Akio, HASHIMOTO Takeo

琉球大学大学院教育学研究科^A, 琉球大学教育学部^B, 鹿児島大学教育学部^C, 長崎大学教育学部^D

【キーワード】 小学校, 複式学級, 理科, カリキュラム

1 はじめに

沖縄県には公立小学校が281校あり, そのうち102校がへき地指定校である(2005年現在)。その中でもさらに規模が小さいため複式学級を設置している学校が69校ある。

複式学級においては, 学級編成や児童の実態等に応じて各学校が主体となって教育課程を編成する必要があり, 授業実践にも単式学級とは異なる工夫を施す必要がある。沖縄県における複式学級の教育課程や授業実践の研究は, 主として総合的な学習の時間に関する地域学習・体験学習や, 国語・算数といった順序性・系統性が極めて重要な科目に関するもので多く見られる。しかし, 理科に関する研究は極めて少ない。即ち, 教育課程編成や授業実践の参考となる, 理科の教科特性・単元特性を十分考慮した研究がなされているとはいえない現状である。

また沖縄県では, 複式学級数の全体に占める割合が大きいとため, 教員として複式学級設置校に赴任する可能性が他県に比べて高い。しかし, 大学でも複式学級における指導に対応できる教員を養成する体系的な教育課程は編成されていない。

そこで本研究では, 沖縄県の小学校複式学級を対象に, 教育課程の編成状況や授業実践について調査した。さらに, 学校教育現場で「複式学級での授業実践」に対応できる教員を養成するための大学等での教員養成への要望事項についても調査した。

2 研究方法

沖縄県内に複式学級を設置する全公立小学校(69校)に事前に電話で協力を依頼し, 承諾を得られた学校(50校)に対し, 質問紙法で調査した。調査の内容は, 柳田・田中らの研究に倣い次の3点

である。

- ① 理科教育課程の編成と順序性・系統性が重要な単元での授業実践について
- ② 理科指導の際に, 教員が教えにくい, 児童が理解しにくいと考えられる内容について
- ③ 大学等の教員養成機関に対して, 複式学級での授業実践に対応する教員を養成するための要望事項

3 結果・考察

理科の学習形態として, 「学年別」「AB年度方式」「単式」が見られ, 各学校様々であった。「AB年度方式」の場合, 児童の発達段階に応じた指導や児童の転出・転入への対応が困難である。そのような事態を配慮し, 理科を単式で指導する学校も見られるが, その結果として他の教科を複々式学級で指導しなければならないなど, 別の問題も生じている。

教員養成機関への要望は, 「複式学級で用いる授業技術・指導法についての具体的実践」など授業技術修得に関する多数の意見を得た。このことは, 教員養成機関が複式学級の授業実践に対応できるような教育課程を新設するなど意識的に対応しなければならないことを示唆している。

【 附 記 】

本研究の一部は, 文部科学省特別教育研究経費措置事業「新しい時代の要請に応える離島教育の革新-長崎・鹿児島・琉球三大学連携事業-」の一環として行われたものである。

【参考文献】

柳田英俊・田中実 2004. 小学校複式理科教育の現状とモデル作成. へき地教育研究 59: 65-72.